

<資 料>

アメリカ精神史を画する制度主義(4)

アントニオ・モンターネル 著

佐々野 謙 治 訳

B. 制度主義の全体的評価

アメリカ制度主義者の方法論の諸問題に関する<著述>は、主として、一般に方法論以外の実際的な課題に向けられたモノグラフィーの中の節とか章という形をとってなされている。またそれは、定期諸刊行物中の臨時の諸論文にも散見される。それでも一般的に見るならば、その著述はいぜんとして二義的かつ部分的断片的な性格のもので、コモンズ(John R. Commons)¹⁾も認めているように、それは「制度学派が当然それに基づいて構成されるべき基本的概念に手をつけようとは」試みていない。

1) Encyclopedia, ………a. a. o., v390.

制度主義の主要<定理>は簡潔な公式にまとめればこう言える。つまり、ある空間の同時代の社会とは、個々人の行為を組織し規制している伝統的、一般的慣習的な諸形式や制度の包括的な複合体を表わしている、と。人間の行為は理性に基づいており、この理性が人間を高めて他の生物以上のものとなす。しかし人間の理性は、社会的共同生活を本能的に規制するのではなく、「制度」を通じて意識的に規制する。すなわち、人間は組織化された共同社会の構成員として「制度化」されるのだ²⁾。「生物としての人間がそこに組み込まれ、この人間がその担い手でもある社会的制度が、まず、人間の精神を生物——例えそれがいかに高度に発達したものであれ——の頭脳と区別する。希少な充足手段の選択や分配は、動物的生物の下では、力の原則、つまりダーウィンのいう意味で

の生存のための戦という原則に従ってなされ、それによって強者が弱者を圧するが、＜制度化された＞人間の下では、その力が＜制度＞によって置き換えられる……余剰物の選択がもはや力に委ねられず、制度によってなされるようになるや、人間生物が人間となる。それと同時に、自然的な希少性の関係は社会的・法的なものとなる」。これらの社会的制度は、科学や理念および技術の発展——これは人間本性に内包されている誘因のおよび動因の諸力によって引き起こされる——に応じて、一定の変化や発展を遂げる。経済的制度は、社会によって需要される諸財を、この社会に供給する際に諸個人がとる行為様式の複合体に依拠する。また経済的制度は、それを越えて、この有用的諸財の使用や調整を規定する。言うなれば「競争の過程」として把握されうるこの制度の発展とその随伴現象は、さらに進んで、どのような行為様式が受けられるのか、また社会的に裁可されるのか、といったことをも規定する。個人や集団の行為（行動）は、いつもかの限界のうちに、つまり上述した社会的裁可によって画される限界のうちに限られる。心理学の見地からすれば、「本源的」な人間性は「一定」したものだと考えられるから、表出する行為の大半は、支配的な制度の構造と照らし合わせて解明・解釈されなければならない。この人間行動が必然的に明らかになるのは、時々制度の構造が、ただ「累積的变化過程」の結果として認識される場合においてのみだ。

- 1) Eva Flügge による制度主義の批判的かつ積極的なプログラムの整理も参照せよ、a. a. o., 347ff.
- 2) H. Kröner, a. a. o., 10.

この一般的経済把握の立場は、何よりもまず、＜批判的＞である。制度主義者は、古典派経済理論の信念や妥当性に、次のような理由から異論を唱える、すなわち制度主義はこう主張するのだ。——古典学派は、人間行為の信用を失っている快樂主義的把握に依拠している、また個人主義的競争という古典学派の基本的仮説は、十分なものでないばかりか、きわめて不正確だ、それに古典学派の主要問題である経済的「均衡」関係の決定は、自然科学の支持しにくい類推を基にしており、かくしてそれは経済組織を静態的に考察するというやり

方に行きつくが、この考察方法は近年の経済発展には適応されえないものだ、と。かくして制度主義者は、精密理論を重視せず、経済的諸経過を、もっぱら諸事実の広範な認識に依拠して解明することを望み¹⁾、そして次のような意見を述べる。つまり、基本的に正しい経済諸現象の認識は、ただ社会的制度の性質やその形成力と関連づけてのみ可能だ、しかるに経済的調和の思考は、単に二義的な分析の目的にとってのみ有用である、と²⁾。制度主義的経済理論の本質的構成部分をなす批判的立場は、ほぼ明確にその輪郭が描かれると思えるのに、制度主義の積極的内容は、そのおよそのところも定かでない。〈制度主義的公準に基礎を置いている経済学説の境を設定し、その内容を教義的に素描するということは、ことの性質上きわめてむずかしい〉。経済的諸制度（例えば雇用体系、競争、信用・私有財産の体系等のようなもの）それ自体が、社会的制度のもついちだんと複雑な一般的構造を孤立的にみたもの以外の何物でもないという事実と直面すれば、一方の経済学と、他方での社会学、政治学および法学といったもの間にある特殊な学問上の境界が曖昧になりがただ。またその上、制度主義的に志向する経済学によって分析されるべき素材は、事実資料の集積であるから、〈経済生活への制度主義的接近は、量的・記述的あるいは歴史的な性格をもつ個々バラバラの各論的諸研究という全く収集のつかない混乱に落ち入りやすい。〉

1) E. Flügge, a. a. o., 344を参照せよ。

2) 「価値や価格形成をある自然力の結果として理解する精密理論は、ヴェブレンによれば、価値や価格形成にとって決定的な諸力、つまりすべての社会制度を除外するのである。すべての社会制度が重要でないものとしてわきに押しやられ、摩擦をひきおこすものとして考察からはずされる。しかし、国民経済的諸事象の原因は、まさにそこにあるのだ。であれば、人はこの社会的制度をもはや所与の事実として受け取ることではできないのであって、それらを価値や価格の形成諸力として当初から国民経済理論の中に取り入れなければならない。かくして、国民経済生活の構造が経済学の最も重要な研究対象となる。」Hermann Kröner, a. a. o., 58f.

こうしたことと密接な関係にあるのが、何故科学見分析のために、制度主義の統一的で独自の性格をもった特殊な手段や方法論が、これまで展開されずにきたのかということだ。ここでは制度主義は次の確信によって導かれる。すな

わち、すべての経済学的研究の正当性の根拠は、かかる方法論的なものとは別様だし、また方法の意義と課題は常に道具として役立つということにあるのだから、すべての経済学的分析のよく知られた一般に流布した方法を利用してもよいし、また新しい方法を展開してもかまわない、という確信がそれだ。こうして制度主義者達は、社会的資料（従って制度）の取り扱いや加工において、一定の〈方法的適応力や順応性〉を得ようと努めるのである。この社会的資料は、制度主義の意見に従えば、できる限り多くのきわめて種々の種の接近に委ねられなければならない。何故なら、この社会的資料の下では、すでにしらかの性質をもっている単線的方法にその問題を解決すべく示現し与えている、いわゆる一元的な性格をもつ諸現象が問題なのではなくて、歴史的、社会的および自動機能的な〈多次元性〉の多形的複合体——この複合体の社会的「空間」における現実性や観象性は、ただ方法的多様性、つまり累積的理論の「深み」によってのみ正しく評価される——が問題であるからだ。まさにこの点に、厳格な古典派理論との人目をひく対立がある。古典派理論特有の厳格さの実体は、周知の通り、それが個々の無数の現実的段階や状況および理論の形成に適応されるべき教義的構想や分析上の処理方法をあらかじめ考えてかかる——否、規定してかかる——という点にある。

〈記述的〉〈量的〉および〈発生的〉方法が、経済研究の典型的な制度主義的処理方法とみなされるべきだという意見が、今日しばしば主張される。この主張は全く誤りというわけではないが、少なくとも著しく不正確である。偏見をもたない観察者にはすでに明白なことだが、「記述」が「方法」だとはほとんど規定されえないのである。何故なら、多くの方法的また方法論的諸問題は、まさしく具体的資料の現実的記述から生じる、というのが常だからだ。

それにもかかわらず、制度主義の学派が〈記述〉の領域で及ぼした影響は広く、それは主として、記述的研究の著しい優勢という結果をもたらした。記述の方法が統計であり、またここで制度主義的処理方法と自然科学的処理方法が係りあう。すでに制度主義の方向がもっていた目的論的性格が、純粋「経済記述」に刺激的に働かざるをえなかったのであり、こうしてそれは、経済記述の定言

的な判断を改めざるをえなかったのである、——このことは、きわめて種々な経済的および社会的領域でなされた多くの出版、なかんずく労働組織についてのホクシー (Hoxies) の研究や、その他の団体・組織について諸研究をみれば明らかだ。ここにまさしくヴェブレンもいるのであって、この彼は、制度主義の批判的基本姿勢と記述に対する偏愛との間には一定の類縁関係がある、という解釈の正しさを認める。客観的事実の評価や検討を行うものとしての「批判」は、もちろん、綿密な事物にそくした(だがある程度までは主観的・選別的な)事実素材の記述から出発しなければならないし、検討されるべき、また評価されるべき素材は、それを平易にわかりやすくして、ある程度まで批判者や批判によって呼びかけられる者の眼前に展開されなければならない。制度主義者が、彼らの社会秩序の批判に結びつけて、その批判されたものを確に「改善」された何かにおき代えようとの、あるいはその改善へ至る道を示そうとの志向をだく限り、つまり彼らの批判が「創造的」批判であろうとする限り、さしずめ予備的な社会的実在の記述は、変じて方法的不可欠の条件となる。＜かくして、立ち入った、否、しばしば余りにも念入りな実在記述にこそ制度主義的信念の本質的特徴はあるのだ、しかもこの記述は、社会生活の動力や原因となり、またその生活の差別、闘争および不調和を生む時として不思議な意識、否、本能と結びつけてなされているのが常である。なかんずくヴェブレンは、その連関を明らかにし、そして記述の方法を、最終的な意味では他の方法よりはるかに正しいと認める。と言うのも、「製作精神」と「利潤精神」との間にある深い対立を、彼ほど充分明白に認識できたものは誰もいないからだ。

例え＜量的方法＞が時おり厳格な理論的規定の方法だと考えられることがあるにしても、やはりそれは、むしろ記述的性格の特殊な一方法だとみなされうる。確に量的方法は制度主義の理論と何んら本質的な関係はないのだが、それでもこの方法が制度主義の理論と密接に結びつけられているのは、それが古典派経済学に一般的ななかの方法とはその種類からして区別される理論的諸帰結に至る通路を与えるからなのだ。この関係で特徴的なのは、すべてのしかるべき制度主義者達が、ミッチェル (Wesley C. Mitchell) の『景気論』を¹⁾、彼ら

によって企てられた古典派への批判的攻撃に積極的かつ有効に貢献するものと評価していることである。いかなる種の量的分析であれ、それがなんらかの一定の理論的構想との方法的類縁関係を示すということはないのだが、この量的研究が制度主義者達に特別の関心をもたれ、とりわけ彼らによって用いられるのは次の理由による。つまり、それが経済的資料を古典派のシェーマがあらかじめ備えていたのとは異なったやり方の理論的検討や認識に委ねる手始めとなり、またその弁明ともなるからだ。特に量的・記述的研究は、経済的資料を、生活の実践的諸関係に照応するような範疇の枠内で提示するという傾向を示す。例えば、「コールマニー、商業券、銀行貸付、農地抵当、公的信用および等々のものを取り扱う利子論と体系的利子理論との相違は種におけるそれだが、しかし前者が後者にとって代りはしない」²⁾。その他の例に団体組織についての研究がある。この領域では一般的理論の仮定は有力な事実の背後に押しやられたままだ。こうした研究は、その研究に駆りたてた本来の目的はさておき、確に重要だと見なされうる、つまりそれが総括されて一般経済理論の広範な改善のための基礎を提供する研究だと見なされうる。

いわゆる〈発生的方法〉または因果発生的方法——これはそこから一定の状況が推論されるべき原因や原因複合体の解釈を目指す——は、恐らく同様にして、特殊の制度主義的方法と見なされうる、もっともその方法はドイツ歴史学派の最もよく知られた代表者達も等しく好んで用いていたのだが。仮に人が、現在の諸現象は過去に必然的に宿る原因に常に発するという見解を主張するとすれば、人は論理的に次の結論に達しざるをえない。つまり、歴史的発展過程の結果としての諸現象の解明は、発生的方法の手助けのもとでのみ可能である、というのがそれだ。

1) Treatise on Business, New York, 1928.

2) Encyclopaedia…… a. a. o., v389.

＜多くの制度主義者が、発生原理に夢中の余り、この原理を排他的な唯一の方法だとしてその不充分さを看過し、そしてかかる把握の考えられる危険性を

充分明確に認識できなかったということは、残念な事実である。>。と言うのは、現象の発生史が必ずしもその本質を示すものではないからだ¹⁾。多くの「歴史的事件の連鎖」を「原因」と「結果」という相関的表現に移し代える従来の形では、發生的方法は十分に綿密なものではないし、故に科学にとってのその価値も疑わしい。それと全く同様に、發生的方法は、経済学者が経済生活の歴史的に形成された現実を分析する際に直面する<すべての>問題に、満足いくような正確な解答を与えることはできない。この方法論的「ハンディキャップ」のもつ危険を除去しえるのは、ただ演繹的論理の原理を同時に使用することだけなのだ。しかし制度主義者達はリカルド派の理論にいたく失望していたので、何んらのためらいもなく、演繹的・静態的理論のすべてを捨て去ったのである。にもかかわらず制度主義的思考は、發生的方法と演繹的方法との<二者択一>の可能性を、あちこちでよく考慮しているのだが（ここでは演繹的方法は経済的原因の「一般化」というようなものと理解されている）、それが發生的方法の本来の意義を十分に認識していたとは思えない。それはともかく、發生的方法が制度主義者によって特別に選択されたのだが、この選択は何んら驚くに足りない。何故なら、経済の現実を分析する際に制度主義者達をゆり動かしたかの種の問題に答えるには、發生的方法が他のいかなるものよりも適切なものに思えたからだ。

- 1) 「社会的制度の生成についての歴史的研究は我々におよそ可能なものを提供し、とりわけ、それらの理解へも<導く>であろう。しかしそれは、おのずからこの理解を提示するのではない。」 Joseph Schumpeter, a. a. o., 359.

かかる方法論上の諸問題や、その全般的な科学的効果の不明瞭さに直面して、アメリカ制度主義は恐らく希望されたほど——とは言えこの希望が常に必ずしも表明されたわけではない、否、それは表明されてもきわめてまれになされたにすぎないのだが——人を信服させるものではなかった。マックス・ウェバー(Max Weber)、つまりドイツでの制度主義的な志向をもつ経済学説の提唱者と呼ばれている彼は¹⁾、あらゆる生活現象をその文化的な意味において把握し認識するという(彼にとって中心的な)問題を、彼の方法論の文献においてア

メリカ制度主義よりはるかに大きな光力をもって明示する。社会科学者の客観的観点と主観的観点について論究し、また科学的認識と実践的社会政策との間に直接的な関係を見出すことの不可能を論証し、それとの関連で自然科学との類推を適用されえないものとしてきっぱりと回避しようとの決意を下した彼・ウェバーは、〈理想型〉を、複雑な社会的資料を取り扱うのに必要な程度の抽象を得るための主要な補助手段として採用した。この技法——ウェバーや彼以来の社会科学が、その助けで、研究されるべき諸過程の歴史的発展の内部において重要だとみなされる諸要素を分離し、そしてそれらを統合して、起るかもしれない論理上の異議にも持ちこたえるだけの一つの像を創り出すところのこの技法——は、「発生原理」の一つの特殊な適用だとみなされてよい。だが、「厳密な〈理想型〉は一致した支持を得がたいだろうし、またその構成そのものが偏見の侵入を許す全く個人的な作業である」²⁾ということが本当だとすれば、ここでもまた、一定の理論的考察は避けられないであろう。

1) P. T. Homan in: Encyclopaedia, ……a. a. o., V390.

2) Encyclopaedia, ……a. a. o., V390.

制度主義者が方法や体系の問題に関心をもたなかった原因の一部は、次のことに帰されうるであろう。つまり、ほとんどの制度主義学者の思考がそれを中心とし、従ってこの制度主義者達が彼らの多くの研究をささげたのは、科学的解明の問題というよりはむしろ直接的公共政策の問題であるのが常であった、ということに。マックス・ウェバーの信奉者達とは反対に制度主義者達は、まぎれもなく、〈政策的〉および〈社会批判的〉な立場に立った。制度主義者達の主要研究領域は経済的な意味をもつ階級やその他の社会制度である。その研究の際に彼らは現存制度の秩序を単に認識するという点に留らない。彼らの志向はむしろ主に「社会改良的」なものであり、社会的「福祉」の高揚に向けられている。すなわち、社会的「福祉」の問題、経済的意識的な秩序づけと支配が、経済学の支配的な問題となる¹⁾。制度構造の可変性は、彼らにとっては、ただ歴史的に把握されるべき事実ではなくて、何よりもまず改良政策の操作に

駆り立てる道具である。彼らは社会形象の構造の可変性に注目することによって、次のことを彼らの第一の課題とみなすのだ。人間の認識に社会的に変化するものの指導・支配を教示し、人間の認識をそこに導くという課題がそれだ。彼らの社会認識は社会秩序の再建を目指す。彼らにとって経済学とは理論的研究の総括というよりはむしろ社会福祉のための道具なのだ。

1) F. Flügge, a. a. o., 346を参照せよ。

時として次のような意見が述べられている。——制度主義的経済理論は、個々の経済制度や、かかるものの経済的意味の研究から成っている、つまり社会経済的組織形態をその機能と構造に注目して探求する研究から成っている、と。制度主義についてのこの意見表明は、大半の制度主義者達の研究に共通している主要関心事や彼らの最もひんばんな問題設定を前景にうち出しているとはいえ、それでも制度主義的経済学説本来の積極的な内容への通路を提示するのに適切なものとは思えない。一致した標識や共通の方法論の基本姿勢が欠けているという点から見て、制度主義的理論の内実は、ただこれらの個別研究の成果の総和としてのみ把握も評価もされうるのだ、個々に追求された方法があったにもかかわらずそうなのだ。

この関係においてさらに困難なことは次の事実にある。つまり、諸制度の少なからず注目に値する研究が、教義的な制度主義とは内心無関係だと信じ、自らは社会的事象の制度主義的叙述に賛同していない研究者達によってなされているという事実がそれだ。しかし、かかる研究を制度主義的理論の研究・勢力領域から排除することは適切だとは思えないし、概してそれが可能だとも思えない。

制度主義の科学的整理には「具体化」も「抽象」も同様に——つまり順次交互に——役立つ。「国家」という抽象的実在は、その具体的組織や国家成員の行為連鎖において、いわば手に掴むように理解される。だがすぐさま、その具体的組織や国家成員の行為連鎖は抽象的に単純化される。そして国家の組織は、行為系列において結びつけられている人間がそれに対峙する諸制度の社会的骨

組となる。これは、さしあたり静力学において完成している分析に委ねられるものだ。だがここでも、制度主義的努力は止まず、それは歴史的に形成された諸制度についての認識を得ようと努め、さらに時々の諸制度の人的結合存在への順応や、それらの相互適応を得ようと努める。ここに、制度主義の動的・改革的な傾向がある。それは、変化している社会的従ってまた経済的諸状況に基づく制度的構造の不断の改善や「社会的調整」¹⁾(つまり「社会統制」)に向うのだ。制度と状況のこの「同時化」ということが、——単にアメリカにおいてのみならず²⁾——経済政策の種々の領域で、一連のモノグラフィーが取り扱う理論的および実践的諸問題となる。

1) Ch. A. Beard und M. R. Beard, *The American Spirit*, a. a. o., IV667.

2) 従って、例えばローベルト・ネール (Robert Nöll) も、「国民経済の信用基金 (信用問題の解決についての研究)」Berlin 1934, V, という彼の著作の序文をこう書いた。19世紀初頭の理論的見解に今日なおも基礎を置いている銀行・信用制度は、全く変化させられ高度に産業化された国民経済の近年の要求に対応できないということを示した、と。」

かくして、この内的な方法の二様性は、制度主義を<静態論>と<動態論>(これは近代アメリカの経済理論に典型的な区別だ)という二元論的原則の結合したものとして特徴づける¹⁾。しかもこの結合の緊密さは、理論的・理解的志向と批判的・改革的志向というこの「二心」によって妨げられることはない。我々の叙述の初に展開された用語の区別との関連で我々はまたこう言うことができよう。——制度主義学派は、その注意を<制度化>の現象に、しかも<構成的局面>にも<修正的>局面にも向けたのである。構成的制度化を制度主義学派は、その<自然的>あるいは<合理的>という枠組の中で理解しようと、つまり制度の形式的形成を通してその<意味>を解明しようと試みるのであり、修正的あるいは補完的制度化をその形象形成的・改造的な諸力の中で示し、それを<改革>しようと試みる、と。

1) J. Schumpeter, a. a. o., 913 ff., 921f を参照せよ。

あらゆるヨーロッパの生の哲学的試みと比較して制度主義の方向の内的異質

性に注目すれば——その際もちろん我々は経済的制度主義を厳密な意味での生の哲学と同時に挙げる冒険をそれなりに認める、否、究極的に認めるのだが——制度主義的方向は、「一見、素人芸のように見える」と言われることもしかるべく是認されよう¹⁾。「思考がそれより広い範囲の哲学像なしにたびたび展開される。概念取り扱いの技術がきわめて不充分であり、哲学的体系を記述するという意図が全くない——それは制度主義の法・経済理論が誤って偉大な哲学となったかのように見えると言っていいほどだ。」しかしフォゲリン (Voegelin) は、すぐに上に続けて、アメリカの知性という大きな領域の中でこれらの関係を理解し、制度主義(単にコモنز的なものだけではない)を正しく評価するために必要な詳細を与える。すなわち彼はこう言う。——この見た目の素人芸や体系形成の看過は、この問題への典型的にアメリカ的な対処の仕方による、つまり「日々の経験におけるアメリカ人の明白な挙動による……アメリカの研究者がアメリカの歴史と現状に求めたもの、つまり法制史と最高裁の判決の分析は、アメリカ人一般にとって、彼らの生活問題への通路をなす。そして生活の問題が最も深く握まれた所で、その形而上学的内容も最も光り輝いて現れたのだ。ヨーロッパでは、個人の哲学的文化の究極の産物として現れる同じ生の哲学が、才ある人から出て知的エリートに向けられる同じ生の哲学が、アメリカでは、次のような一人の男によって見いだされた。その彼(コモنز)——農民・労働者の境遇に生れ、つきない慎しさと親切な人格を持ち合わせた人——は、彼が見るところのもの、それだけを言わなければならないのだというようなまなざしをもって、十年もの長い研究において、歴史的また政治的経験を収集した。それは、彼がそこで生き、それに味方して生きている社会、この社会意識に最も高度の哲学的表現を与えるためであった。彼の技術上の不備はそのまま彼の本質を成す。彼と同じ社会にある人は、しかるべきヨーロッパの哲学者が意のままにとり扱う道具の完備を不当なもの、つまり隣人よりましであろうとする試みだ、と感じたであろう。精神的完成への愛から、客観性や体系それ自体への情熱からなされる思想構造の構築は、その構築者を孤立させ、彼を人間共同社会から、つまり共同生活の価値から引き離す。かくしてその構築され

たものを享受するのは必然的にその人だけだということになる。サンタヤーナ (Santayana) は、余りにも良き哲学者であったが故に、非アメリカ的だと感じられ、アメリカでは非常に嫌われていた。しかるにデューイ (Dewey) の名声は、形而上学についての彼の良き書物より、教育についての彼の価値の疑わしい書物に負うところが大きい。体系の欠如は、精神的円熟とかその完成とかいう単独の価値が、扶助とか保全契約とかいう社会的価値に比べて、低く評価されたことから必然的に生じた帰結なのだ。

- 1) 例えば、E. Voegelin, a. a. o., 237 は、J.R. コモンズを特に引きあいに出している。

制度主義は、事実に基づく経済的諸現象や諸制度の精密な統計的・経験的記述を必要とし、その際なかんずく求められるのは、一般社会的、法のおよび心理学的な影響の分析である。制度主義の新しい視界は、まず第一に、〈発展思想〉——この思想に基づいて社会的現実の生成が説かれるのだ——によってもたらされる。この点に関して、特にいわゆるアメリカ精神生活の発展期に、西洋哲学、社会学、生物学およびその他の科学との係りと、それらの検討の結果として生れた実り多い効果が現れるのだ。この時期に、近代アメリカ〈哲学〉の萌芽、つまり「社会における個人の良き生活」の促進という目的をもつ、主として〈実践的倫理〉の基底となる萌芽が生じる。この土着の哲学「体系」の基礎づけと結びつけられる作業をしたのが以下の名前の人達だ。チャールス・H・クーリー (Charles H. Cooley)、ジョン・デューイ (John Dewey)、チャールズA・エルウッド (Charles A. Ellwood)、ウィリアム・ジェームス (Willeam James)、エドワードA・ロス (Edward A. Ross)、レスターF・ウォード (Lester F. Ward) 等々。これらのアメリカ倫理の基礎づけ者のすべてが、アメリカ民主主義の要求において一致した考えを言明し、この原理の実現のために大きな運動を形成した。彼らの生活、彼らの経験、共感や関心事が、アメリカ哲学を説明し説得するのに重要な貢献をした。彼らの作業がそれと密接に結びつけられ、またこの作業の意味充足がそこから汲みとられたかの

理想や関心事の精神的内容は、19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカ民主主義の志向と計画に由来する。この「総合哲学」は、アメリカの大地がもつ精神的形成力を示現し、また「地方経済を背景にうねり高まる産業主義という上げ潮によって引き起された混乱に立ち向うフロンティア天性の強力な知力」¹⁾の特殊性を反映する。自然なままの土着の産物として、世紀の変わり目が伴ったかのあらゆる理念の酵母として、この一種の「アメリカ生活哲学」の初めての自意識的公式化は、内深い国民的欲求に応じた。

1) Ch. A. Beard und M.R. Beard, *The American Spirit*, a. a. o., IV665.

この精神世界の刻印は、確に多くのヨーロッパ的諸要素の協力のもとに行われたが、しかしその諸要素の受け入れは、土着の哲学的見解の創造を阻止するよりはむしろ促進するものであった。このアメリカ哲学は、我々の世界を、「変化している、成長している、拡大している、活動的な宇宙」として把握する。「流動的な進化的なその性質は、静態的な幾何学的公式の外的表示というよりは、むしろ無限に隔った不定の目的に向って絶えず動く生命力の外的表示だと解釈される……」²⁾ アメリカ哲学は動態的宇宙の現実から出発する。絶えざる流れの中にある宇宙は、静止を識らずそれを経験せず、また受動的観照というあらゆる審美的享受を障げる。こうした進化主義的哲学の影響の下では、人間知が現実の生活にとっての器官となり、それは「生存のための戦」において、その究極的な最も高度な価値を表わす。思考は人間の諸経済という実存的機能に尽し、その働き・効果——これによって人間は初めて危険と奇襲に満ちた世界で繁栄していくことが可能となる——によって、それ自身で自らの正しさを立証する。「学者達は、知識の道具論にかぶれるようになると、それに応じて、ものの起源の研究や実在論的決定の探求（実在あるいは存在の科学）を断念して、人間存在を強化するのに最も役立つ目的の策定に、そのエネルギーを集中する」³⁾。このアメリカ哲学は、「非倫理的」だとまではいえないが、理論ないし実践に対して、関係原理以上の積極的道的評価を下さない。にもかかわらず、それは白熱した理想主義に満ちている。だがこの理想主義は、宗教的なものという

より現世強調的なもの、超自然的なものというより人間意識的なものだ。この新世界の「人道主義的理想主義」——この理想主義の宿命論的信仰は「聖寵選択」の教義を識らず、高々「創造選択」の教義を識っているだけだ——は、たいてい倫理的世界改造論という形態をまとっている。楽観的な進歩の信念に満たされて、アメリカの倫理的理想主義は、現実世界の不正と邪悪を認めるが、それもただ、この不正と邪悪を根絶するために認めるのだ。「理想を策定し、その実行の道具立てをすることで、人道主義哲学は、倫理的動機が奉仕する創造的知性を解き放した」³⁾。

1) ch. A. Beard und M. R. Beard, ebenda.

2) Ch. A. Beard und M. R. Beard, The American Spirit, a. a. o., IV666.

3) Ch. A. Beard und M. R. Beard, The American Spirit, a. a. o., IV667.

形而上学的思弁の拒否と手を携えて、伝統的哲学的構想——これはあらゆる存在の帰一的な根拠を経験界の彼岸に仮定する——からの離反が進み、また社会的現実の領域における経験的知識をも全体的体系として総括しようとの課題に向う方向が生じた。制度主義が、＜社会批判的＞基本姿勢に忠実に、社会科学本来の意味をも生活それ自体に対するその科学の成果のうちに見ているかぎり、それは目的論的に規定されている。そして制度主義は、歴史的考察と経験に基礎づけられ、万事を確固とした規則に従って整序する科学的志向——この志向は「実証的なもの」つまり明白なもの、所与のもの、疑いなきものから出発し、これらのものにその研究と叙述を限定する——を表わし、その上、事実による十分な基礎づけのない形而上学的な解明を論理的に成り立たない実践に効果のないものとみる故に、それはある程度まで＜実証的＞だとみなされよう、少なくともここでは、実証主義との本源的類縁関係が否定されるべきではない。

アメリカ制度主義は——恐らくこう主張されるだろう——経済理論に批判をくわえる場合に理論の問題を最後まで熟考していたとはどうしても言いがたい。つまりアメリカ制度主義は、経済理論を経験的検証としては扱いにくいと言明し、他方で、量的分析をその資料とみなし、具体的現実には適合するものだとみ

なすのだ、しかも、その分析方法を信頼するや、すぐにそうみなすのだ。しかしその方法も、発生的方法と同じく、しばしばたやすく個人的に影響をこうむった結果をもたらすのである。結局明らかにされたことは、制度主義的関心は、その方法が経済の変化過程の叙述や解明に適していると思えるものならなんであれ、そのすべてを、進んで意欲的に承認するということだ。この制度主義的関心に半ば有利で半ば不利な動機について論争することは、例え無駄だとしても、他面で恐らく人は、次のことを疑うであろう。それは、経済的秩序や安定の諸要因を取り出して説明するのに確に適切な、従ってまたこれはこれで古典派理論に手順の基礎を与えた方法と、しんから完全に手を切ることが必要なかどうか、ということだ。制度主義（同様に歴史学派）が正統派経済理論にくわえた最も重要な批判、すなわち正統派の機械論的抽象は社会的福祉の認識やその実施に役立つことができないという批判は、かれこれするうちに過度に言々されるということになった。つまるところ、およその経済研究が目指すのは、経済生活の諸経過を人間の「調整」のもとに置くことだ、しかしながら、合目的性や論理への動機は、「本源的に共在するものを、現にあるものの説明に解消し、それを並存するものに変えることを要求する。この分割の必要性は制度主義的な問題設定についても妥当するのである」¹⁾。

1) Eva Flügge, a. a. o., 352.

制度主義的経済学が時に進んでその欠陥を転じて長所となしうる備えをしていたということは、全く争う余地のないことだ。制度主義的経済学は、およそ概して、経済的合法則性の最終的形式や、その科学的に正密な公式にまでおし進むことができなかつたし、そしてまた、このできなかつたことをかってほとんど遺憾に思うこともなかつた。それどころか、この制度主義的経済学は、形式的な「経済」の論理を基に組み立てられた研究を全く無視し、さらにはそれを嘲笑しさえした。それは一方で、統計的あるいはまたそのような性質を有する「報告に従う態度」に喝采しながら、他方で、同時代の制度的構造の研究に係わりあう諸研究を喜んでとり入れたのである。

制度主義は大規模な社会科学研究を異常なまでに鼓舞・刺激して、モノグラフィー的叙述の累積を促した。だが制度主義は、通常それがまさに問題である場合にも、その資料やその特殊な認識を整理して総合することを拒んだ。制度主義者達の一本気な努力は、比喩的評言が許されるならばこう言える。つまりその努力は、方向を異にしている経済の教義との関係においてだけでなく、その自体のもとでも異質音を発している個々の方法論の理解から、調和的複合和音——「学派」という表示を元来正当化しているその目的論的・進化論的および社会批判的本性の一致にふさわしい、否、何よりその主要メロディーの特徴的な働きを基調としている随伴和音をかなでたであろう複合和音——を出すことに成功しなかった、と。制度主義は、二者択一的方法も一般的に適用される概念も見い出さず、実際、国民経済学をきわめて種々な研究類型の集合に変えるという点に一定の満足を見出した。その限りで、この研究類型の集合は、社会的秩序や秩序連関の理解に適切だと思える科学的基礎の形成に寄与している。従ってこの点でも、多くの点におけるように、ある程度までは歴史学派の経験がくり返されるであろう。

とは言え、この点では今日でもなお、すべてが絶えざる流れと活発な発展のうちにある。制度主義者達は、いずれにせよ、近代経済理論家の最も活動的な集団の一つとみなされなければならないし、彼らのその特殊な思考がどのような衝激を経済学の全体に与えるかということを見ることが不可能だ。アメリカの国民経済学が非常に活気ある戦闘的理論家達の多くを有している時に、それが従来そのまま硬直することはあるまい。確かに、この運動の一部分は、何んらかの考えられるあらゆる異論をもものともせず、古典派経済が経済問題の唯一の正しい解釈の源泉だとか、それが経済分析の排他的に認められた確実な道具だとかみなされえなくなるほどの大きな穴を、古典派経済学という権威の城壁にあけることに成功した。だがつまりは、制度主義者達も、古典派経済学を克服しようと試みる諸学派そのものの精神的後継者なのだ。「記述」と「理論」は経済の現実把握にとって相補う相互に不可欠な手段だとみなされるのが正しい。「純粋記述」という概念は、それ自体一の矛盾である。と言うのは、

およその記述は選択という必然的要因を内包しており、この選択が「理論的」性質を有しており、ただそれには、しばしば精密性が欠けているというだけのことだからだ¹⁾。

1) Eva Flügge, a. a. o., 351.

制度的構造とその発展についての著しい数の有用な研究に刺激を与えたことによつてのみならず、新しい重要な理念を採用したことによつても、この経済思想上の運動は、きわめて実り豊かなものであった。制度主義は、その科学的特殊性に適している完全な方法論的基礎を創り出すことに、これまでほとんど成功しなかった。体系的経済学の教科書のいずれの著者達も、自らを自発的に制度主義の信奉者だとは言わなかったし、また「どの大学においても、経済学の〈制度的〉取り扱いが、価値、価格、分業およびその他の基礎概念の取り扱いの上に基礎づけられている経済理論の一般的講義に、首尾よくとって代るということもできなかった」¹⁾。制度主義の文献の大部分が否定的異議の申し立てによつて成っている。実際それは、制度主義の目的や方法を首尾一貫して例示するような建設的寄稿をほとんどしていない。それ相応の分析「道具」の創造的総合的な発展を通じて、制度主義的方向が近代経済理論に及ぼした影響は確に著しいと言えよう。だが「その成り行きは、制度主義的接近のみが達成しえると思えるものよりも、方法論的にもっと広範なもっと良く整備されたものであるはずだ」²⁾。より包括的な理論的建物を構築できるためには、制度主義者達は、理論的なすべての演繹と戦うという姿勢を恐らく放棄しなければならないであろう。そうしても、制度主義的处理方法が伝統的な経済学にとって代ることはないだろうが、現実接近の問題取り扱いという意味において、それをさらに発展させることはできる。と言うのは、社会科学的現実、つまり「制度」の領域で制度主義者に自明のこととなった発展の思想は、科学的伝統にとつても有効であるからだ。制度主義——これは方法論的根本問題を「決定的に解決する」ものではない——は、それが理論的努力を「それ自身の肩に背負って」なそうと試みている限り、現存の諸問題をただ単に複雑にするだけだという恐れがあ

る。そう考えると、制度主義者達が、彼らを我々の科学の最良の伝統から引き離してきたかの道の良き部分に立ち帰らずにいるということは恐らくできまい。そして事実、近年の制度主義的文献は、方法論的自覚という道を歩いてきたように思える。制度主義的性格をもつ大半の出版物には、近ごろ、社会批判への熱中よりも方法論的「反省」が多く認められうるのだ。しかもこの反省は、近代の非制度主義的理論を明白に「再方向づけ」し、それを心理学、人類学および生物学の近年の進出線と一致させようとしているのだ。こうした新しい一著作の著者は、その序文ではっきりと次のように述べている。自分の書物は³⁾、「現実的制度的基礎に基ずく経済学の方法や概念の再方向づけに貢献するものとして、また社会科学の共同——この共同は当代の倫理学や哲学の傾向も経済学をそこへ招いている初期の巨匠達の幅広い人文主義な道に基ずいて経済理論を再建するにちがいない——に貢献するものとして、企図されている」と。シュモルラー (Schmoller) は、この点でも制度主義に模範として役立つことができる。と言うのは彼もまた、普遍妥当的因果法則を志向するという形で「理論」への欲求を正当だとみなし、理論は一定の問題群に対して価値をもつものだとみなしているからだ。否、シュモルラーは、彼の『綱要』において、理論の概念装置を利用し、また多くの問題をめぐって、その思考方法そのものをも自ら利用しているのだ⁴⁾。

1) F. A. Fetter, a. a. o., 52.

2) Paul T. Homan in: Encyclopaedia,a. a. o., V392.

3) Radhakamal Mukerjee, The Institutional Theory of Economics, London 1942.

4) 例えば, J. Schumpeter, Gustav Schmoller und die Probleme von heute, a. a. o., 357.

古典および新古典の理論の前提に関する論議の中で、制度的要因がどのように取り扱われたかということを示すためには、多くの客観的努力がなされるのを常とする。と言うのは、合理的意志とか個人的選択とかは、種々の社会科学の創始者達——彼らは「個人」を社会的規範の分析や論理的取り扱いの出発点と考えた——が思っていたよりも、通常はるかに小さな役割しか演じないのだと

いうことを基礎づけるためには、その多くの客観的努力が不可欠であるからだ。それと全く逆に近代制度主義は、個人と社会との間の連関——ここでは本能と理性の間および個人的利益と集団の利益との間を媒介する任務が制度に与えられている——の有機的考察を志向する。それ故に制度主義的理論は、今日以前にもまして、社会的「均衡」に不可欠な諸条件を提示することに係わりあうのであり、そしてそれは、考察の三つの局面を区別する。すなわち、生態的、機械的・技術的、および制度主義的的局面というのがそれだ。これは、ウェバー (Max Weber) やゾンバルト (Werner Sombert) の類型学的取り扱いについて¹⁾、必然的に三つの「国民経済学」を生じさせる。生態的なそれは「人間と土地」あるいは「人口と生活維持手段」との関係に係わりあう。機械的・技術的なそれは (特に価格理論は)、交換法則——この法則においては文化的あるいは生態的要因が承認されているものとして仮定される——と係わりあう。そして、制度主義的理論は人間が自らその環境に適応するために歩いてきた道を研究する。この文化過程の研究は、「全文化的状況」の分析に導くが、この分析では価格理論家の心理学的理論は失敗せざるをえない。こうして制度主義は「新しい社会心理学」を得ようと努める。この社会心理学は社会心理学で、個人と社会との生きた統一を明示するものでなければならず、それは、人間の神秘的な本能や明白な欲望よりも制度をより重要なものだとみなすのだ。何故ならば、個々人の行為を「社会的調整」に委ねることを可能にするのが、この制度であるからだ。従ってかかる近代制度主義的理論は、心理学、人類学、社会学、歴史学、倫理学、法学、政治学および文化科学一般の複合体となる。

1) H. Kröner, a. a. o., 37ff も参照せよ。

この最近の制度主義の発展が歴史学派およびヴェブレンのような「以前の」制度主義者達の方法論上の足跡をたどらなければならないということは明らかだ、特に経済理論をその他の社会科学と結びつけようと試みる場合にはそうである。にもかかわらず、制度主義的全著作においては、経済的および社会的理論の発展を注釈し批判するということがなおいわれており、ことに古典派およ

びその近代の継承者の均衡理論が、この点で、如才のない必ずしも好意的でない評価にさらされている。地域的考察やその叙述方法を撮取することによって、制度主義という精神的全体現象は、個人、制度および地域（空間）という三つの「広がり」をもつ（また具象的な）科学体に姿を変える。

制度主義の内的な多様性のために、その像についての専門家的および一般的意見は、今日なお定まらずにいる。そしてこの意見は、近い将来も、人が価格経済という最も内的で近ずきがたい問題の解決を国民経済学本来の課題とみなすか否か、あるいは、人が外的素材をも経済研究の領域に引き入れる傾向をもつか否か、に応じて異なるであろう。制度主義者達が我々の注目に値するのは、その信奉者の数によるのではなく、彼らが示したその熱意、学識の実質、および顕著な反抗の諸著作によるのである。多くの点において——制度主義者達が用いる用語や確信に満ちた楽観主義の精神において——制度主義者達は、かの集団、つまり「新政治経済学のイニシアティブをとりアメリカ経済学会を創設した」¹⁾ 18世紀の集団を想起させる。だがいづれにせよ、新しい制度主義の努力のおよそは、一般的社会理論——この理論から経済理論は無限に切り離されたままではありえない——のより大きな有効範囲をもつ新しい概念を獲得するためには、歓迎されてしかるべきであった。と言うのは、国民経済学は社会哲学という実り多い土地をそれ自身の利害のために耕すということを喜んでなすであろうからだ。従ってこの点では、次のデューイ（John Dewey）の予言は適中しないと言えよう。——「聖人はその教会に留って祈り、他方卒直な罪人はこの世を支配する」。

1) Frank A. Fetter, a. a. o., 535.